

## 仏教文学会二〇二一年度十二月例会 シンポジウム「六道語りの中世」要旨

### 《シンポジウム趣旨》

聖衆来迎寺蔵の国宝「六道絵」（全十五幅）は、中世仏教説話画の記念碑的大作である。その成立は謎に包まれているが、近年美術史研究により各画幅や画題の図像学的構成と伝来について詳細な分析が提示され、飛躍的な解明がなされている。一方、六道については、文学研究から、『平家物語』灌頂巻に代表される六道語りをめぐる詳論が積み重ねられてきた。こうした研究成果を踏まえ、本シンポジウムでは、六道をめぐる唱導・教化の詞を包括的に「六道語り」とし、「六道絵」の宗教空間をその儀礼と唱導の詞によって新たに読み直すことで、美術史研究と文学研究の協働による発展的研究を試みてみたい。はじめに山本聡美氏により、聖衆来迎寺蔵「六道絵」と『往生要集』、および横川とその宗教空間について、最新の研究成果を概説していただく。続いて阿部美香氏により、『六道釈』の詞の分析から「六道絵」と二十五三昧会との関連について報告いただく。さらに阿部泰郎氏により、慈円の『六道釈』を起点に『閑居友』や『平家物語』灌頂巻へと結実してゆく女院の「六道語り」について報告いただく。

なお、本シンポジウムは二部構成で進行する。第一セッションで各パネリストにより「六道絵」と『六道釈』をめぐる概説をおこない、そこでの提起を踏まえ、第二セッションにおいて各々の問題に照らしつつ、さらなる考察を提示することで議論を深めたい。二つのセッションを通して、絵画・儀礼・文学の密接な関わりを具体的に明らかにしながら、より立体的な唱導の様相を浮かび上がらせることを目指したい。（恋田知子）

### 《参考文献》

- ・ 泉武夫、加須屋誠、山本聡美編『国宝六道絵』中央公論美術出版、二〇〇七年
- ・ 山本聡美『中世仏教絵画の図像誌』吉川弘文館、二〇二〇年
- ・ 阿部泰郎『中世日本の世界像』名古屋大学出版会、二〇一八年

### 横川霊山院の六道絵―『往生要集』からの飛躍

山本 聡美

聖衆来迎寺本「六道絵」は、旧軸木に墨書された修理銘から、中世を通じて比叡山横川霊山院に伝来したことが知られている。霊山院とは、源信が正暦年中（九九〇～九五）横川兜率谷に建立した堂舎で、毎月末には霊山院釈迦講と呼ばれる法華経講贊が行われた（『山門堂舎記』）。同じく源信が横川に創建した華台院の迎講とともに、浄土往生信仰実践の道場であったが、室町時代中頃まで存続した後、近世に至って廃絶した。聖衆来迎寺には、源信が著した『霊山院釈迦堂毎日作法』と『霊山院式』が現存し、本尊の釈迦如来像に対する生身供を中軸にした法会の実態を知ることができる。そのうち『霊山院釈迦堂毎日作法』において、生身供の目的を餓鬼・畜生・地獄などの苦しみを離れ浄土へ生まれ変わることに規定しており、これは源信が寛和元年（九八五）に横川首楞嚴院にて著した『往生要集』の思想とも通底する。

聖衆来迎寺本は、各幅の上部に主として『往生要集』に基づく題辞を伴う色紙形が貼られていることから、その思想を具現化するために制作され、中世初頭の霊山院に、源信ゆかりの聖地として新たな宗教的意義をもたらした絵画であることは言を俟たない。しかし一方で、画面の細部を『往生要集』と照らし合わせる時、随所に同書からの飛躍や逸脱が見られることにも注意すべきである。本作は、あたかも『往生要集』というテキストを内部から脱構築し、解釈、増補、編集を経た新たな思想として再結晶化させた「中世の六道絵」なのである。『往生要集』をそのように読み、中世浄土信仰の実態に即して解釈し、さらには大画面上に革新的なビジョンを破綻なく展開できる制作主体をどのように想定すべきであろうか。

本報告では、かつて阿部泰郎氏が紹介した慈円の『六道釈』（三千院所蔵）、そして本シンポジウムにおいて新たに阿部美香氏が紹介する『六道釈』（仁和寺蔵）等の唱導資料を手掛かりに、これらのテクストが示す儀礼空間と聖衆来迎寺本との親和性の高さを明らかにする。その上で、これまで『往生要集』からだけでは十分に読み解かれてこなかったいくつかの図像に関して、これらの唱導資料を通じて新たな解釈を試みる。特に、人道幅や阿修羅道幅に描かれた愛執と鬭諍の場面を、中世六道絵における特徴的な図像と位置付け、これらの場面が必要とされた時代背景について考察する。

## 六道語りの儀礼と唱導―二十五三昧会と六道釈―

阿部 美香

聖衆来迎寺本六道絵は、いかなる儀礼および宗教空間のなかで機能し、説かれるものであったか。それは、横川靈山院を中心とする叡山の、歴史的にも宗教的にも重要な儀礼と、深く関わる可能性があるだろう。そこにおいて注目されるのが二十五三昧会であり、六道を廻向するために読みあげられた“六道釈”である。

六道釈は、恵信僧都源信の『往生要集』に拠り、式次第を整え創られた二十五三昧会のなかで、六道の苦患を明らかにし、廻向するための要となる文である。鎌倉時代には、従来より知られる六道講式以外にも、例えば阿部泰郎が紹介した慈円の『六道釈』（三千院所蔵）のように、施主やそれを営む主体の側から草され多様な六道釈の実践がなされていた。その一端が、天台僧である宗淵により編纂された『魚山叢書』にも収められ、和多昭夫により紹介された高野山金剛三昧院所蔵の二十五三昧式五本のうち一本にも見いだされるほか、仁和寺には嘉禄元年（一二二五）に書写された『六道釈』が存する。それらは、源信の六道講式からみれば異本にあたる。しかし、そこに焦点を当て、その本文と聖衆来迎寺本六道絵の図像と照らし合わせることによって、両者の密接な呼応関係とともに、六道絵と二十五三昧会との関連が浮かび上がってくる。

本報告では、そうした六道釈の詞を起点に聖衆来迎寺本六道絵との関わりを考え、それが歴史的に形成、継承される場と系譜にまで考察を及ぼしてみたい。

## 慈円に発する六道語りの諸相とその系譜

阿部 泰郎

承久四年、乱の破局に際会した慈円は、二十五三昧を営み、その式として『六道釈』を草した。六道の苦患を眼前の人界の営為に見いだす独自の発想は、修羅の鬭諍を和漢の戦さに宛てるが、誰もが直面した乱のことはただ黙して思えとのみ示す。そこに仮想された六道は、一方で承久元年に制作が始められた記念碑的な北野天神縁起絵巻で、完成を放棄し、二巻の壮大な六道絵として結ばれていることに呼応した現象ではなかったか。

同じ承久四年に慶政は『閑居友』を著し、大原に隠棲した建礼門院の許に後白河法皇が訪れる顛末と、そこでの女院の懺悔回想の語りを「かの院の御あたりの事を記せる文」によって説き、庵には「地獄絵」があったという。

この女院の語りは、やがて『平家物語』諸本に、灌頂巻の六道の沙汰をはじめ、女院自身が己の運命の転変を六道になぞらえての「六道語り」として展開される。その基盤には『宝物集』前半の六道説も参照されようが、何より慈円『六道釈』の方法と表現を介してこそ達成された創造であった。

慈円と『平家』をつなぐ導きの糸は、同じく大原に女院を訪った建礼門院右京大夫が、六道供養も営んでいることが『右京大夫集』に、文治年間には叡山坂本に兄尊円の許へ身を寄せて歌を交わしていたことが『拾玉集』に見え、また『平家』堂衆合戦の際に尊円が慈円と歌を交わしていたエピソードのもととなった『千載集』からも察せられよう。